ほんにかえるプロジェクト　会報　　2016年1月創刊

かえるのうた

第2号　2016・3月

画　松永氏

発起人汪のシャバ報告

14 年ぶりのシャバを堪能中の汪さんがどんなことに興味を持ち、どんなことをしているのかを本人に投稿してもらいました。

1月10の日曜日に東大駒場キャンバスにて**映画「それでもボクはやってない」海を渡る～東アジアの法教育と大学生の法意識**というシンポジウムを聴講してきました。

シンポでは周防監督と中国の人権派弁護士の胡貴雲さんの対談が予定されていたが、中国当局の出国拒否（ビザが発行されたものの、当日になって、何らかの理由をこじつけて日本へ行かせなかった）により胡さんの来日そのものが叶えませんでした。

対談でしゃべるよりもこの出国拒否という出来事のほうが対談のタイトル「日本の刑事司法、中国の刑事司法」に即しているかも知れません。如何に中国は三権分立できてないかを語っていて、刑事司法に批判的な意見を持つことは国・政府・体制に反する行為とみなしている証拠でもあるように思う。

映画「それでもボクはやってない」を日本、台湾、香港、中国にあるいくつの大学の法教育授業に取り入れ、推定無罪と言う人権の大原則を教える。シンポにはこの映画の監督である周防正行さんが登壇したほか、各地域の教員と学生も来日してステージに上り感想などを述べました。

台湾からの徐筱菁さん（法学者・台北教育大学教員）は教え子の多くは将来小学校の教員になる子で、テストに長けているけど、法と実生活を結び付けて考えることができない。礼儀正しいけど、それゆえに批判精神が欠けている。

台湾は法治国家であり、人権と法治について教える必要がある。学生たちは具体的な例がないと（人権・法治について）理解できないから、授業に映画を取り入れるのは有効な手法である。それでも有罪判決を出すには十分な証拠が必要と思う学生は少数で、多くの学生は悪い人を逃したらどうするだとか、疑わしきはまず閉じ込めようという。一人ひとりに人権があることを理解していない。

まあこういう意見はどの地域でも多数を占めているようで、同じような報告を香港と中国大陸と日本の教員からもなされた。

シンポジウムを聞いて感じたのは、

中国大陸の大学の教員が自国の人権意識の低さを自覚していて、映画などを通じて法治国家のあるべき姿を法教育で教えていることでした。台湾の教員は高校を卒業したばかりの、将来は小学校の教員になる人を対象に教えているが、その学生たちの推定無罪という原則も理解できない、その人権意識の低さに絶望しているようだ。

日本はどうでしょうか。東アジアの中では自分は先進国としての自負がアリアリの日本だが、痴漢の冤罪を題材としたこの映画を見て中国の学生が言ったように、日本でもそうなんだと言う感想が印象強かった。

ほかの地域の学生は自国の裁判はしばしば法律よりも情と理が優先され、公平性に欠け、法治になっていないと発言し問題意識を持っているようです。

これに対して日本の学生は最年少ということもあってのことか、映画の中での痴漢場面の表現について監督に質問し、高裁に行ったらどうなるのかと聞いていた。推定無罪の原則も大事ですが、自分の子どもが被害に遭ったらそうもいかない様な事を言った。

じゃ自分の子どもが痴漢に間違われる側になったらどうするのかを聞いてみたい。

もう一つ興味深かったのは、「学校、教育、社会、国家、国際問題などについて発言したいと思いますか」という設問に対して大陸は約 60%、香港は 65%、台湾が 40%の学生が発言したいと答えたが、日本の学生（39 人）は無回答でした。言いたいことはないということでしょうか。日本の学生に不満がないというよりも主権意識がなさ過ぎているように思えたし、憲法 31～40 条の適正手続きを遵守しなければ最も人権を侵害することを理解していないにも思えました。

これは私個人が加害者側にいたから思うことではなく、中国を例に持ち出さなくても人権を最も侵害しうる存在は国家であることを理解してもらいたかったのです。

もっと疑問を感じたのは香港の教員の発言で、冤罪と言うテーマをそっちのけで学生たちの雨傘運動の話をし、アイデンティティについて延々と話していた。それは郷土愛というよりもナショナリズムにすら感じる理性なき感情論でした。

私が思うには返還前だって提督はイギリス女王が任命した人で、香港人が選んだ人ではない。その民主主義国家の時代にすら出来なかったことを遅れ

ていると看做している社会主義国家に当然のごとく求めるのは間違いではないか。市民運動はとても大事ですが、時代遅れのナショナリズムを持ち出されると嫌気が差すし、それでは北京政府と何の違いがあろうかとも思いました。

アンケート（4 地域の 9 大学の 246 人を対象）も実施したのですが、台湾のその大学の学生の 53%が来日したことがあると回答したのに対して、大陸の大学生はわずか 2.7%の学生しか日本に行ったことがないと回答している。面白いのは日本人の友達がいますかの質問に対して、台湾の学生の 29%がいると回答しているのに対して、大陸の学生がいると回答したのは 6,7%でした。この数字から分かるのは、大陸の学生は日本に行く機会に恵まれていなくても友達を作れることが分かると同時に、台湾の学生は半数以上も日本に行っているにも関わらず友達を作れるのはそのさらに半数強しかいないことのように思う。そこに私は大陸の若い世代の友好な姿勢を感じました。

もちろんアンケートを別の角度で見れば、台湾も香港も 30%台の学生に日本人の友達がいるのに、大陸の学生に日本人の友達がいるのはわずか 6.7%という現実。中国からの観光客の多さ・爆買いがよくニュースになりますが、多くの中国大学生の両親は農民であることから考えると海外旅行させるほど余裕がないことも分かった。海外旅行よりも教育が重要と認識しているところに私は希望を見出した。

出所すると、経済面や時間面の制約はあるものの、やはり自由がある。興味が有ることを見つけ、学んでいくことができる。

日本の刑務所ではあらゆることに制限をかけている。こういった時にある刑務官は「息することまでは制限していない」と真顔で反論していたことを思い出す。

学ぶことはとても大事であるように思う。学ばなければ新しい生き方を見つけ、実行することもできないように思う。更生とはそういうものではないでしょうか？その機会を社会・刑務所が提供するべきではないでしょうか？

中のかえるめいと仲間へのお願い

皆様との手紙のやり取りを担当しているのは心の病も抱えるボランティア女性です。ネガティブな発言はとても動揺させますので、苦情もしくは対応についてのご意見は「汪楠親展」と明記してください。真摯に対応させていただきます。

かえるめいとのいのり

副代表　井手 愛子 s.c.q.

扇が何本もの骨の下部に穴を開け、ねじ留めして一本の扇子に纏められるように、「ほんにかえるプロジェクト」の要は祈りでありたいと思います。

西行法師は伊勢神宮参拝の折に「なにごとのおわしますを (か) ば知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」と詠みました。

じんわりと心に染み出るものがあり、西行と共に手をあわせている自分がいませんか。どなたのおかげか解りませんが、今ここにこうして在ることが有難い。存在の根底で己の創造者との邂逅が“祈り”かもしれません。

プロジェクトは多くの人々の出会いと活動の場となっています。さまざまな年代と経歴の人が塀の内と外で、本の受け渡し・検索代行・文通・カードやTシャツ作成などの活動に関わっています。関わりあう人々を「かえるめいと」とよびましょう。

心ひとつに繋がっていけるよう、同じ祈りをとなえたいと思います。

また、会員になった人に会員証を発行し、その裏面にかえるめいとの祈りを記すことにしました。

会員の証の表面

ほんにかえるプロジェクト会員の証

あなたは本会の主旨に賛同され
会員として登録されましたので
「かえるめいと」となりました。

かえるめいと

代 表　田中 伸彦　㊞

会員の証の裏面

かえるめいとの祈り

み母マリア
罪深い私をかえりみてください
まことの回心に導いてください
新しい一歩を踏みだす勇気と覚悟を
お与えください

１日１回この祈りをとなえましょう

実物は名刺大です

編 集 後 記

「かえるのうた」は奇数月に発行し、8 頁で活動報告をしてゆきます。会計報告は半期に１度いたします。お預かりしているお金は個人別台帳にのせてあり、検索代や本の送料など記録しています。そこから差し引いてゆき個人のお金がなくなったら通知しますので１回１回お返しするのではありません。検索は１度に２件までです。

「救援」紙に載せていただいてから、新規入会希望者が殺到しています。既に会員になっている方をきちんとサポートしたいので、新規の入会を見合わせております。口コミでの入会は信頼関係を構築しやすい傾向にあり、対応するようにしております。　　編集部

「ありがとう」という言葉が私を変えてくれた

松永　忠夫

私は24歳の時、欲望という誘惑に心を奪われ強盗殺人という大罪を犯してしまい、無期という判決を受け、長い長い受刑生活が始まった。反省するどころか、夢も希望も生きる目標さえなくなり、頭の中は何時も自分が楽な作業をすることばかり考え、責任感など微塵もなかった。いかに職員に見つからないよう反則するかということだけで、規則など無視していた結果、何度か懲罰を受けた。

私には反省するという意思さえなかったが、仮釈放という恩恵を2回も受けたのに仮釈期間中守るべき遵守事項さえ守らず、平成4年に遵守事項違反で3回目の刑務所生活が始まった。

印刷工場で機械工を1年位やって、工場の書記（刑務所によっては計算夫）を10年近くやっていたのに、親しくしていた人に頼まれ、物品授受で懲罰を受け、印刷工場に戻され、また機械工として作業をしていた。

ある日印刷機に左手の人差し指を挟まれ爪をはがす怪我をしてしまったし、毎年冬になると、霜焼けになって、歩くことさえ不自由な状態のため1カ月位入病（病人がいる棟に入って休養すること）してしまうことの繰り返しのため、そのことで機械にはつかせてもらえずいらいらしていた時に、当時の工場担当が「どこでも好きな所につかせてやる。どこがいい？」と言われた時、自分の口から、生まれてはじめて「ありがとうございます」という言葉が自然に出た。

以前のわたしの行動、態度を知っている担当さんは一瞬びっくりした顔をしていたが、にっこり笑って「よく考えて決めればいいから」と言われ、私も再度「ありがとうございます」と言っていた。「ありがとう」という感謝の言葉が相手も本人をも、気持を晴々させるものとは思わなかったし、以前の私からは想像すらできなかった。この心嬉しさ、楽しさは何なのだろうかと、自分なりに舎房に帰ってからいろいろ考えてみた。物の見方、考え方によって同じ風景でもそれぞれ違って見えるということにやっと気がついた。

私は見方もただ同じ所からきり見ていなかったし、同じ考えだったから、心の狭い弱い者になっていたんだということに気付き、それからは、意識して「ありがとう」と言えるようにしている。

（表紙の絵を描いて下さった人です。脳梗塞で倒れ、ご闘病中にもかかわらずの入稿である。ありがとうございます。

なお、無期刑は現在全国で1842人。昨年出所した人は7人。そのうち、いわゆる帰り無期は1人だけでした。）

かえるプロジェクト作業風景

事務局会議
田中代表(右)
井手副代表(左)
佐野事務局秘書(中)
汪事務局長撮影

ケベックカリタス
修道院にて

Tシャツつくり
デザイン型抜き　みのるさん
（現在も三鷹市で路上生活しています。この時期は一晩中歩き、寒さをしのぐ。シケモクを拾い、雑誌の紙で作ったアートな箱に入れて売る。フリースペースで個展をやったり、ファンが多い。）

シルクスクリーン版で T シャツを染めている本田さん
（プロジェクト事務局の主力スタッフ。彼女の手書きの手紙に感動されるかえるめいとも多く、塀の中のファンがとても多い。

寄付された書籍

書棚を整理している汪楠さん

書棚は毎日伸びている。廊下も寝室も壁には書棚ができ、ぎっしり本が詰まっている。部屋も狭くなりましたが、本人も出所二年目位にして太り始めました。皆様もお気を付けください。出所してすぐの暴飲暴食は確実に太ります。そして働かない人はすぐに音信不通になります。わかりますね？

かえるめいとに本を発送する

検索をしている人
印刷をしている人
書籍番号を付けてリストアップしている人
みんなに「写さないで！」と言われて、残念ながら顔は見えません。